

# 読んでいてよかった

「万が一、容体が急変した場合は、延命措置を希望されますか。」  
昨年暮れに、母が入院しました。高齢ですし、処置が簡単ではない状況でしたので、医師もそのように尋ねざるを得なかったのでしょうか。私は生まれて初めて、自分の判断が人の命を左右する状況に置かれました。怖かったというのが正直な気もちでした。

三年生が国語の授業で『高瀬舟』という小説に取り組んでいました。私が参観した時には、教師の範読を静かに聞きながら、目で文字を追っているところでした。音読は話のクライマックスには至っていなかったもので、生徒たちは心穏やかに聞き入っていました。

この『高瀬舟』は、自殺を凶ったが死にきれずに苦しむ弟を目の当たりにした兄が、突然身に降りかかった状況に戸惑いながらも、最後には苦しむ弟を安楽死させる話です。死に至るまでの苦しみがあった時、少しでも命を長らえさせるべきか、それとも、避けられない死であるなら、できるだけ早く楽にしてやるべきか。後者を選択することを安楽死と言います。それをテーマにしています。

私も確か、中学時代に『高瀬舟』を読んだと記憶しています。その時には、中学生の自分とかけ離れた内容にさほど興味をもちませんでした。しかし、その後、身内の死と出くわすことで、死は避けられない事実であり、『高瀬舟』に書かれていた内容は人間にとってゆゆしきことだと思いうようになりました。

しかし、ゆゆしきことだと思っても、死に向かって苦しんでいる人がこれまで私の目の前にいなかったため、安楽死は是非かの結論を出す必要はありませんでした。したがって、今回医師に「延命措置を希望するか」と尋ねられた時に、初めて結論を出さなければならなくなりました。言い換えれば、六十歳にして初めて、私はそれを自分のこととして考えたのです。

作者の森鷗外もりおうがいは明治から大正にかけて生きた文豪であり、戦時下の医師（軍医）でした。それを知ると、彼が安楽死をテーマにした『高瀬舟』を書いたのもうなずけますね。医師である彼は、明治時代から人の死と直面していた分、死というものを深く考えていたのだでしょう。安楽死については、現在でも議論されています。国や宗教などによっても考え方が違うようです。人間がこの世の中にいる限り、決して消えることのない永遠のテーマでしょうね。

読書では、こんな厳かなテーマにも触れることができます。ただし、読み手がどのような構えで作品に向かうかにもよりますけどね。おもしろくない、つまらないと言って避けていけば、考えや生き方は一向に深まりません。医師の投げかけに結論が出せなかった時に、私の脳裏に自然と『高瀬舟』が蘇ってきました。読んでいてよかったですね。

(二月二十四日記)

